

編集後記

編集長(ダン シロウ)

ムムム、400ページ越えだ。このところの新連載ラッシュ。それが目的ではないが、なんと凄いことだと編集長は喝采！

前号No. 44がアップされたのを、いつものように印刷して一冊だけのマガジンを作ろうとした。ところがプリンターが不具合を起こして叶わないことになった。

300ページ超えの雑誌は、いつも両面印刷設定にして完成させているが、もう一台の安いプリンターは両面印刷に手間がかかる。そこで最近まで印刷版は作らずにいた。その結果起きたのは、マガジンを目にする機会の減少。

プリントして製本した厚い冊子を身の回りに置いていると、何時というわけではないが手にとってパラパラ見ていたようだ。だから全文は読めてはいなくても、おおよそ了解している中味になっていたのだろう。そんなわけで第44号は、私にとって馴染みの薄い一冊になっていたようだ。

今号の編集にかかろうかという今になって、新しいプリンターを手に入れ、印刷・製本して44号に目を通し始めることになったのだが、なかなか読み応えがある。

編集直後の時期には、料理を作った後の主婦／主夫みたいに、ちょっと食欲がないのかもしれない。しばらく置いてから味わってみるととても美味しい。そんな経験をした今回だった。

＊

今号も新連載が四本ある。そのうちの一本、渡辺原稿は第一回と第二回の一挙掲載である。前号開始予定で超早めに原稿を受け取っていたのを見落としてしまっていたのである。申し訳ないことだ。そこでこういうことになった。

編集員(チバ アキオ)

京都市右京区内で移動することが多くなった。

京都市は東に左京区、西に右京区がある。左京区は電車の路線も、有名寺院も多く、観光をはじめ、にぎやかである。対をなす右京区は河川が多く、水害の歴史が多かった。現在、社会福祉士の実習を送り出すときには福祉施設がある地域の防災ハザードマップを学生と共有している。阪神淡路大震災を経験し、東日本大震災の被災地、大川小学校を訪れたものとしてすべきことと考えている。

右京区を自転車で動いていると本当に川や水路が多い。京都に住んで20年以上になるが地域の理解のために川は欠かせない。川や、水路、川に蓋をして道路になった暗渠(あんきょ)も知ると更に深まる。京都には「〇〇川通り」という川由来の道が複数あるし、調べると住民が自ら勤労奉仕で川を付け替えた歴史にも出会う。

川は海に通じる。山の恵みを平地に、そして海まで運ぶ。対人援助学マガジンも、現場から社会に様々な豊かなものを運ぶ。時には氾濫し、時には水が少ない時もある。鴨長明さんの「ゆく川の流れは絶えずしてしかも、もとの水にあらず」という言葉を思い出した。川の水の流れは絶えることなく続いているように見えるが、それは決して同じ水ではなく、移り変わっている。一見不変に見えるがそうではない川の姿に、世の中の変わらないものはないという意味であるのは皆様ご存じの通り。対人援助学マガジンにも、今のご時世にもピッタリな言葉だなと思う。川のようなマガジンでありたい。

編集員(オオタニ タカシ)

短信にも書いたのですが、4月から所属が変わりました。所属が変わったため、新しく取り組むこともあります。臨床心理士の資格を取って15年くらい経ちますが、ここにきて「臨床心理学」に関する授業を初めて担当することになったりしました。やったこともないので、毎回準備に追われますが、どうせやるならやっつけ仕事ではなく面白く仕上げたい。苦手な精神医学の部分をどうしたものか…と思案して、ふと思い出してマガジンのバックナンバーから必要な資料を見つけ、授業内容をまとめました。「あ、マガジン見てみよ」。

この発想が選択肢にあるか無いかが、かなり大きくなってきた気がします。

一方で、変わらないこともあります。実感としては、変わらないものの方が多い気がします。このマガジンの執筆と編集もそうです。また、マガジン執筆者訪問記は順調に2回目を迎え、対人援助学マガジン読書会もスタートしました。変わらず続けていくことの中にも、自分にできる範囲で何らかの“よい変化”を付け加えていきたいです。そして、そんな営みを一緒に続ける多くの執筆者の皆さんがいることを本当に心強く思い、いつも励まされています。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻45号

第12巻 第1号

2021年6月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第46号は2021年9月15日
発刊の予定です。

原稿締切2021年8月25日！

執筆者募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数も、心置きなく書

いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。 現在非会員で書いていただく事になった方には、[対人援助学会への入会](#)をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

保護者と学校の連絡ノート。ずいぶん昔だが、我が家でもしばしば活躍した。当時の我が家は、学校優先ではなく、家族行動優先で夫婦は一致していた。

だから冬には毎年、一家揃って北海道にスキー旅行をしていた。一年一度の贅沢だった。当然週末だけではカバーできないので、学校を休むことになった。親が仕事の休暇を取っているのだから、子どももそれでいいとは私の言い分。

でも、多くの子ども達も親の頭にも、皆勤賞がまだ存在した。そんな中、学校は他にすることがないときに行けば良いと思っていた私は、子ども達にも押しつけの強い迷惑な親だったかもしれない。

楽しいことをさせるのが一番と確信を持って、その主張を延々と書かれた連絡ノートを受け取った先生達も迷惑なことだったろう。教師によって個人差の大きいノートへの回答だったと思う。

中には登校した日、その間の実施課題を休み時間中に仕上げろと命じた、意地の悪い先生もいた。

団士郎

(2021/06/15)